

私の先輩

のやまさよ

第一志望の高校に落ちた。

四月から女子校に通うことになって、落ちこんでいる私に、電話の向こうのおばあちゃんは言った。

「そこ、私の母校だよ」

知らなかった。私、おばあちゃんの後輩になるんだ。

同じ市内に、ひとりで住んでいるおばあちゃん。ちよつと変わっているけれど、おもしろくて私は好き。

「入学式に行けないけれど、そのうち、遊びにおいで」

ひざを痛めたおばあちゃんのために、四月の第三日曜に会いに行くことにした。ちゃんと制服を着て行こう。

古びた三面鏡に映る私は、少し大人びていた。おばあちゃんの時代と違っけれど、桜の形の校章は同じだ。

おばあちゃんは白いハンカチを持って、となりの部屋に行ってしまった。なかなかもどってこない。

しばらくするとドタドタと足音がして、小さかったころの自分がやってきた。しかも、いっぱい。

赤い着物は三才の私。ようちえんの制服は五才。ズボンの私は、スカートぎらいの八才のころ。

「ちよつと、おばあちゃん！」

家の中は動物園のように、一気にうるさくなった。

「もう！ あの力を使ったでしょ！」

なんと、おばあちゃんは不思議な力を持っている。アルバムの中の私を、現実の世界によびだせるのだ。

「大きい美菜ちゃん、だっこして」

赤い着物を着た私が、ひざの上ののつてきた。重い。

「ずるい、わたしもおんぶして」

ようちえんの水色の制服を着た、五才の私。

「じゃまよ。私はあんたたちの『センパイ』だからね」

八才の私は、覚えたばかりの言葉を使いたいらしい。

「センパイ？ なに、それ？」「知らない」「ちよつと！」

となりの部屋から、呪文のような声が聞こえてきた。

「おばあちゃん！ これ以上出しちゃだめ！」

あわてて、おばあちゃんをささえる。小柄で背中を丸

めているおばあちゃんは、ごく普通の人に見えるのに。

「みんなを、元の世界に戻した方がいいんじゃない？」

力を使わずに、おばあちゃんが疲れてしまうから。

おばあちゃんは「そうだね」と言い、ぶつぶつと何かを

唱えた。三才の私がふつと浮かんで消えていく。続いて

五才の私と八才の私も、みんな静かに消えていった。

静かになった部屋に、窓から日が差している。私はお

ばあちゃんのそばで、ひざを抱えてすわった。

おひさまと、おばあちゃんのおいはよく似ている。

「ねえ、おまえもやってみないか」

おばあちゃんは、軽い調子で私をさそう。

「私はできないよ」

そう言うとおばあちゃんは、さびしそうな顔になった。

「そうだね。だれでもできるといっわけじゃないからね」

この力は、選ばれた女の人しか受け継がれない。

「でも、でもさ、もしかしたら……」

おばあちゃんは期待を込めた目で、私を見ている。

私はたたみの上を、じりじりと後ろに下がった。

「ムリムリ。そんなすごい力を持っているわけないよ」

おばあちゃんは、深くため息をついた。

わかっている。おばあちゃんはさびしいのだ。一人ぼっ

ちでいること。力を受け継ぐものがだれもないこと。

「おばあちゃん、ごめんね」

私はおばあちゃんの後ろから、そつとだきついた。お

ばあちゃんの背中は、思ったより小さかった。

「でも、私も帰らなきゃ」

私は、小さな声で言った。

「アルバムの中に、そろそろ私も戻してちょうだい」

私は、たたみの上の写真を拾い上げた。

「桜が丘女子高等学校入学式」

お父さんとお母さん、真ん中に高校の制服を着た私。

この後すぐ、私たちは事故にあった。大型のトラック

とぶつかつて、無事だったのはカメラだけだった。

「お父さんやお母さんはよびださなかったの？」

私は、写真を見つめた。会えるなら、お母さんに会

たかった。お父さんにも会いたかった。

「だめだったんだよ」

おばあちゃんは、小さい声で言った。

「出てきたのは、おまえだけだったんだよ」

もしかしたら私も不思議な力を持っていたのかもしれ

ない。だから私だけ、ここにいるのかもしれない。

もし生きていたら、私は、おばあちゃんのいい後輩に

なれたのだろうか。

「おばあちゃん、また、よんでね」

おばあちゃんに写真を渡して、私は静かに目を閉じた。

